

# 八雲病院、転院に不安 コロナで重症化リスク 容体急変時など課題も

07/26 11:07 更新



6月に行われた搬送リハーサルで、患者の乗り込み手順を確認する八雲病院の職員ら

新型コロナウイルスの感染が広がる中、国立病院機構（東京）が8月、筋ジストロフィーと重度心身障害を専門に扱う系列の八雲病院（渡島管内八雲町）を廃止し、札幌や函館に患者を移送する計画に、家族や病院職員の一部が懸念を強めている。患者の多くは人工呼吸器を付け、感染した場合の重症化リスクが高いためだ。移送を前にしたりハーサルでは容体急変時の対応などの課題も浮き彫りとなり、移送の延期や手順の改善を求める声も出ている。

「平時でも動かすことが困難な患者を、なぜ今搬送するのか」。八雲病院に入院する筋ジス患者の親戚の一人はこういぶかる。

機能移転自体に反対ではない。ただ新型コロナウイルスの流行で先が見通せない中、計画ありきで移転を進めようとする機構の姿勢には疑問を感じる。患者の家族に付き添い、病院側の説明会に出席しても不安は晴れず、「家族の複雑な心境を思うだけで胸が痛い」と明かす。

同機構は2018年、病棟の老朽化などを理由に八雲病院を廃止し、系列の北海道医療センター（札幌）と函館病院への機能移転を発表した。八雲病院の入院患者199人のうち、札幌に142人、函館に54人を8月18～21日の4日間で搬送し、残る3人は別の日に系列の帯広病院に移す計画だ。

患者の多くは車いすや人工呼吸器を使用し、外部の音や光などの刺激で発作を起こす恐れもある。このため搬送は数台から10台前後の車列を組み、病状に応じて医師が同乗する救急車か、看護師のみの福祉車両に分乗して行く。八雲病院の医師や看護師のほか、東北など国立病院の約100人が支援要員として加わる大がかりな移動となる。

ところが今年に入り、新型コロナウイルスの感染が拡大。移動中の患者や医療スタッフ双方の感染リスクのほか、高速道のサービスエリアはじめ不特定多数が出入りする場所を利用する際の不安要素も出てきた。

重度心身障害で八雲病院に入院中の女性の家族は、自宅がある函館への早期搬送を望みつつ、新型コロナウイルスの報道を見るたびに「本当に大丈夫なのか」と心が揺れる。

八雲から札幌の病院までは245キロ、函館病院までも82キロ離れ、同機構も「ここまで長距離の移送は経験がない」とする。福祉車両の患者が急変した際は、救急車に乗る医師の指示に基づき、看護師が処置するか、路上で停車して医師が治療することになるが、人工呼吸器の調整などは医師しか行えない。高速道で安全に処置できる場所を確保できるかなどの課題もある。

6月には移送当日と同じ経路を走るリハーサルが行われた。参加した複数の看護師によると、車列の一部が乱れ、医師が乗る救急車が他の車両から離れる場面や、患者の車の乗り降りが想定の時間で終わらなかったケースがあったという。看護師の一人は「懸念が一つでも残る以上、搬送すべきではない」と強調する。

機構は今後について「感染状況を踏まえ、慎重に判断する」とするが、現段階では計画通り進める方針。移送時の課題が明らかとなった中、今月13日には患者家族が搬送の差し止めを求めて函館地裁に仮処分の申し立てを行い（現在は取り下げ）、病院職員でつくる道医労連も移送の延期を要請した。別の看護師は「せめて1日の移送患者を少人数にし、支援に当たる人員を手厚くするなどの態勢を整えるべきだ」と訴えている。（水島久美、斉藤千絵）